第 24 回研究大会

口頭発表「動物飼育でつながる子どもと家庭と幼稚園」

景谷裕香　別府涼子　田端敦子　秋吉梨緒

はじめに

武蔵野大学附属幼稚園では長らくお世話になっています獣医師のご指導と見守りをいただきながら動物飼育を行い，それぞれの学年に適した動物を飼育しています.

また，園では，週末や夏休みなどの長期休暇中に，園児の家庭へ飼育動物の貸し出しをしています. そして，コロナ禍で家庭で過ごすことが多かった日々の中での，この体験は，子どもたちを成長させ，家族に変化をもたらすことを実感いたしました.

今年度の４歳児は，ウサギの状況と，それによる獣医師の助言から，家庭での預かりについて，これまでより一歩踏み込んだ取り組みを行っています. 実際に家庭に動物を招いての様々なエピソードとともに，その効果と素晴らしさをお伝えします.

３歳児の頃は，学年で２匹のモルモットを飼育していました. ４歳児では，クラスで１羽ずつ，ウサギの飼育をしています. ウサギは，保育室前のケージで飼うため，とても身近な存在であり，好きな時にエサをあげられることで，「自分のクラスのウサギ」という気持ちが芽生えています. 初めは，やりたい子が自主的に世話をするところから始まり，２学期には当番制になっていきます.

中川獣医師からのお話

進級して間もない頃，獣医師からのお話を聞き，世話の仕方を教わります.

また獣医師が，子どもの質問に一つひとつ丁寧に分かりやすく答えてくださったり，ウサギを抱っこしている子どもに「耳があたたかいよ」「ここを触ってあげると喜ぶよ」など教えてくださり，子どものウサギへの興味，関心を高めてくださいます.

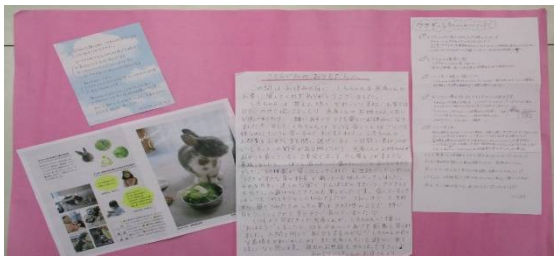
週末預かりが始まるきっかけ

週末預かりが始まるきっかけについてです. ウサギの病気による入院と退院があり，職員の週末預かりの輪に保護者も加わることになりました.

獣医師から「動物の世話は休みの日も続く事」「保護者が大切に世話する姿を子どもに見せることは，教育的効果がある」と聞き懇談会で保護者に呼び掛けることで，希望者による，週末の預かりが始まりました.

預かりを経験した子どもたちは，クラスの仲間に認められる喜びを味わい，それを聞いた子どもたちは，今度は自分も預かりたいという気持ちへとつながっています.

保護者からのお手紙



預かりをしてくださった保護者の方が，家でのウサギの様子と家族の姿や感想をお手紙にして書いてくださいました. クラスの子どもに向けた言葉で書かれた内容であったり，ウサギ新聞のように仕上げて下さったり，子どもたちも楽しく報告を聞くことができています.

メールでいただいたお便りの一部

＜20226.10　Ｙくん＞

クッキーちゃんを預かった時の様子です. Ｙに聞いたところ，「楽しそうにおどっていたよ！いっぱい，とびはねていたね！」とのことでした.

パパからは「いっぱい食べて，いっぱいうんちしていました」とのことです。

Ｙが「汚れているから洗おう！」と朝と夕方にケージをきれいにしていました. そのときに「ふくときは雑巾を使うんだよ」など，率先してパパに教えながら，お世話をしていました. パパはクッキーが可愛くて仕方なく，ほとんどクッキーのそばにいて，何かあったらいけないからと心配して，外出しないで，家にいたほうがよい！と，かなり過保護でした.

＜2022. 7. 26　Ｙちゃん＞

・初めて自宅に連れてきたので，Ｙが最初はビクビクしていました. 私が庭でケージを洗っている間はリビングに放し飼いなので，「ママ早くお部屋に来て！」と不安がっていました.
・抱っこしても初めはすぐに逃げられてしまったのですが，少しずつチョコちゃんの気持ちになって，心地よい身体の支え方やなで方も考えるようになりました.
・幼稚園でウサギ当番をしているようで，「私もケージを洗いたい！」「幼稚園ではこうやっているんだよ」などとお世話の仕方を教えてくれました. 年少の時はお世話をするというよりは，ふれ合って楽しんでいたので，成長を感じました.
・ケージから出すと，チョコくんの走り方をまねして，ウサギ跳びをしていっしょに遊ぶ姿が見られました.
・話しかけるだけでなく，お世話の仕方の本を読んだり，ウサギの折り紙や工作をしたりする姿からも，愛着をもっていることを感じました.
・モルモット，ウサギと，複数種類の生き物をお世話することで，比較して特徴を学ぶこともできました. 誤ってケージの扉を開けたまま外出したことがあったのですが，チョコちゃんはきちんとケージの中でトイレをして，いたずらもしていませんでした. 貴重な体験をさせてくださりありがとうございました.

このように，預かりをしなくては見られなかった家族の一面が見られたという報告も寄せられました.

ふれあいボランティア～夏季休業中～

家族の動物アレルギーや住宅事情などにより，預かりが難しい家庭には，日常の保育の中で野菜を持って来てもらうことや，家庭でウサギを話題にすることでも十分動物を思いやる気持ちが育つことを伝えています. また，夏季休暇中には「ふれあいボランティア」として，親子で動物の世話ができる機会を設け，どの家庭も体験できるようにしています.

また，卒園生の兄姉が来ることも多く，動物の世話を懐かしがり，喜んで取り組んでくれます. 「自分の時のウサギは〇色だった」「名前は〇〇だった」など思い出を振り返る姿が見られると同時に，動物を通して沢山の子どもたちとのつながりを感じます.

アンケート　全 16 家族に実施・結果

問１．預かろうと思ったきっかけは何でしたか.

子どもの希望	８人
体験のため	３人
週末預かりに興味があった	３人
その他	２人

問２．お子さんの様子はいかがでしたか.

大変喜んでいた	13 人
まあまあ喜んでいた	３人

問３．ウサギを預かる前と後で，お子さんに何か変化は見られましたか.

あり	13 人
なし	３人

〇預かりをする前と後で見られた子どもの変化
・動物への愛着がわき，興味関心が膨らんだ
・動物を飼うことを強く希望するようになった
・世話ができる自信や責任感が生まれた
・積極的に世話をするようになった
・家と幼稚園の心の距離が近くなった

問４．ご家族の様子はいかがでしたか.

大変喜んでいた　13 人
まあまあ喜んでいた　３人

〇家族に見られた変化
・時間が経っても家族で話題にしている
・家庭での動物飼育が現実的になった
・家族の会話が増えた
・預かり後に寂しさを感じている
・命の大切さを家族みんなで共有できた

問５．ウサギを預かる前と後で，家族に何か変化は見られましたか.
あり　15 人
なし　１人

問６．また預かりたいですか.
はい　16 人

問７．お子さんにどのような気持ちが育っていると感じますか.
・第２子のため，いつまでも甘えていたい気持ちがあったが，守ってあげなくてはいけない存在ができ，お世話や気遣いができるようになった
・他者を思いやる気持ちが育った
・母性のようなものが芽生えた
・弱い生き物を庇護し慈しむ心が育った
・より親しみを持つ存在となった
・命の大切さを知ることが出来た

〇問７の結果から読み取れること
・園のウサギを家庭で世話することで，保護者が我が子の気持ちを身近に感じることができる
・短期間の預かりの中でも大切な気持ちの育ちを感じとれる
・家庭での預かりや，ふれあいボランティアで動物に触れた子は，動物がより身近な存在になり，接することを喜んでいる

●これらのことから，家庭における週末預かりを通しての効果は大きい

おわりに

このような取り組みにより，改めて動物飼育の重要性を実感しています. ３歳児で“かわいい生き物“としての関わりから始まり，５歳児では”自分たちが守らなければならない命”という存在になっていく動物が，心をつなぎ，子ども同士がつながり，更に，家族やその先の子どもたちへとつながっていくのです.

また，命は大切だと学ぶのもそうですが，もっと自然に，自分と同じ境遇として動物の事を考えられるようになり，他者に対して共感の気持ちがもてるようになるなど「人と人との関係を作ること」を学ぶのも，動物飼育の基本として，維持していきたいと思います.

今後の課題としては，動物飼育の大切さについて，保護者へ定期的に知らせ，この活動を続けていくこと，地域にも動物飼育の重要性や価値を広めていくことと考えます.

本園は獣医師の大きな支えと見守りと，また保護者の理解と協力により，このような活動ができていることに感謝し，引き続き本園の文化として動物飼育を継承していきたいと思います.

動物は心をつなぐためにいる
～中川獣医師に教わったこと～

言葉を話さない動物の気持ちを考え，コミュニケーションをとることは，子どもと動物をつなぐことになります. それができると，大きくなった時に人とコミュニケーションをとれるようになるのです. まずは可愛いと思うことが大事で，その気持ちが育つと，可愛いから餌をあげよう，掃除をしてあげよう，という気持ちが出てきます. そして死んだ時にも悲しめるのです.（悲しめるのは小学２～３年になってからかもしれません）

☆これこそまさに，本園が３年間を通して動物飼育を大事にしているねらいなのです.

（武蔵野大学附属幼稚園）